

会へも出席するやうに勤めてくれたものだった。が、私は曲水吟社といふものも知らなかったし、水巴先生の事は前年のホトトギス雑誌評の劈頭二回に亘った虚子氏の評論で略想像するだけの智識しかなかったが、史耕氏珍藏のこの銀短冊はどうにも欲しかった。秃筆に充分墨を含めてすらりと書いたやうな筆意も、この句品も、そして頃合の銀短冊の燻けやうも、凡てがしつくりはまつてゐて、恰も、私の想像にあるその俳人の風格に面すといふ気持がするものだった。私にとつてそれほどのこの短冊も、今度の震災には、史耕氏の京橋の新居諸共焼けてしまつた事と思ふ。

翌年の七月になつて、漸く俳句に夢中になりだした私は、前年失敗してゐる高等学校の受験といふ大役を控へてゐながら、樹人君や花囚君を誘ひだして、初めて曲水吟社の例会へだしぬけに出掛けて行つた。処が、其の席上で一句水巴先生の選に入つたせいもあつたらうが、赤阪丹後町の、谷間とも言ひたい位な樹深いもの静かな辺にあつた渡辺家の控家、その座敷と次の間玄関とを打通した二十人ばかりの句会は、ホトトギスのそれ程大きくはなかつたが、何となく落着いた親しみある句座らしく見えて、まだ挨拶はしなかつたが、着流しの無雑作に在つた先生の姿も、私は慕はしいものに見た。座には、漸く先生との親交が始まらうとした頃の故吉野左衛門先生も在つたし、目黒野鳥氏の印象明瞭な顔も見え、偶然だったが福島の人故雪人氏の姿も在つたと思ふ。この日は夜に入つてから更に小人数で二回目の運座があつた。そして、その日の記事を書く役目が

単に席上の高点であつたからといふ理由で、べら棒にも私に當つてしまふと、帰り際には、先生も一向平気で見ず知らずの私に原稿紙や句稿を手渡される、私もそんな仕事は始めてだったが、勿論嬉しくはあり、大した辞退もしないで引受けてしまつたが、こんな事は当時の俳句会で、もなければ在り得ない事だつたと、今でも床しく忘れない。で、翌日半日は、夢中になつて、借りて来た雑誌を参考にして句稿を整理したり記事を書いたり、兎に角托された、けの原稿が出来上り、二三日の後に、私はそれを抱へて先生を訪ねた。

七月八九日頃だつたらうか、暑い盛りの午後だった。例会へ参会した日とは違つて、単独で先生に見参するといふ事が、いろ／＼な意味で、書生つぽであり田舎者である私の胸をどきつかせた。しかも兩三日後には受験地の京都へ旅立たねばならぬい身でもあつた。

反対の丘に聳える赤い煉瓦の兵隊屋敷を見上げながら、門の前も確か二三度往つたり来たりした。鈴の鳴る門の扉にも冷りとし、玄関までの贅を踏み渡る間、庭との隔ての垣沿に撓わと伸び茂る萩の下枝が、穿き古した木綿袴の裾を払ふのも気遅れだった。格子を開けて案内を乞ふと、何処もかもひっそりと静まり返つてゐて、前日の句会の勝手とは打つて變つて葭戸の影ばかりが森閑としてゐる家の中には、容易に人の気配もない。私は、ふと清境への闖入者といふ気がしてためらつた。するとこつくり人の起上る気配が奥にすると、すらりとした人の姿が私の前へ現れた。先生だった。私は忘れられてもゐなかつた。